木曽川文庫は治水の資料館。水の大切さや恐ろしき歴史から学び、

これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。 冬号は、長良川の支流、吉田川が端を発する郡上市明宝から、その歴史とまちおこしの事業を中心に、

歴史ドキュメントでは、近世の御手伝普請を紹介します。



岐阜県郡上市明宝

ふるさとの街・探訪記

緑豊かな山々と 清流が走る郡上市明宝

エリア・リポート

環境に優しい川づくりと住民参加のまちづくり

気ままにJOURNEY

純白に包まれた明宝で、冬の自然を満喫しよう

歴史ドキュメント

木曽三川における御手伝普請の変質

TALK&TALK

御手伝普請体制の変遷

民話の小箱

小川の大滝の主



国土交通省中部地方整備局 木 曽 川 下 流 河 川 事 務 所

地方の影響を受けながら、歴史を重ねてき

郡上市明宝は美濃・飛騨の境に位置し、両



郡上市明宝のあらまし

地がちょうど五本 気良の両山地と寒水山地が並び、各山 が走り、その東に馬瀬山地、西に奥住・ 郡上市明宝の中央を南北に和良山脈

吉田川筋の集落は明方村とか、明方

の指のように伸び

曽川水系の弓掛川脈を境に東には木 れ、西側には烏帽 支流を合わせて流 が日出雲川などの ています。 河川は、和良山

高山市
荘川町 谷·寒水·気良·奥住· なったと言われていま 四年明宝村に村名変 た。この村の名は、平成 筋と呼ばれていまし す。吉田川筋には、大 たため、明方が地名と と、その方角は東、つま 幡からこの地域を見る 更されるまで使われて り日の明ける方であっ いたものです。郡上八

点在しています 畑佐・二間手の集落が

郡上市明宝

愛知県

峠によって明宝の中心部から隔てられ 域にある小川地区は、岐阜県で最も険 た山間地域です しいといわれる標高九百十二mの小川 木曽川水系馬瀬川の支流・弓掛川流

伊勢湾

縄文時代の郡上市明宝

子岳に端を発する長良川水系の吉田川

ら、寒水川・気良川が吉田川に流れ込ん が明宝の中央部を流れ、西部の山地か ハヵ所発見されています。 縄文時代中期の遺跡は明宝から、

印となる立石(メントル)も発見されてい 土しています。また、炉の跡や住居の目 西端、吉田川右岸で昭和四七年(一九七 一)に発掘され、多くの土器や石器が出 店町遺跡は吉田川上流の畑佐集落の

八人の家族が数 模などから、七、 す。遺跡の炉の規 るといわれていま 教的な意味があ 巨石建造物の一 ます。メンヒルは つで、墳墓とか宗



家族で住んだ集落があったと推定され

郡上藩の大きな財源に。明治時代には製糸

産業が成長。平成一六年には郡上市明宝と

して、新たな一歩を踏み出しました。

ます。この畑佐で発見された鉱山が、近世の 三木氏が侵入。畑佐の砦で戦いが起きてい ました。戦国時代には明方街道から、飛騨の

大集落があったことがうかがえます。 いることから、清水を中心として栄えた す。この遺跡から多数の遺物が出土して た。遺跡のすぐ横にはマキの巨木があり 縄文土器片百個余りが発見されまし 調査は昭和三年(一九二八)に行われ、 流する北東側の段丘にあります。最初の 木の根元には清らかな清水が湧りていま 森本遺跡は、日出雲川と弓掛川が合

土地を選んで住んでいたようです。 は、水や獲物が得やすい日当たりの良い や弓掛川の近くで発見されており、人々 明宝の縄文遺跡の多くは、吉田川筋

中世から近世へ、支配の変遷

和)主・東常縁の子、常和が畑佐に移住 たようで、室町時代に篠脇城/郡上市大 吉田川筋の集落も、東氏の勢力下にあっ 後、鷲見氏は没落しました。明宝地内の 東氏が支配していましたが、応仁の乱以 下総国(千葉県)から移ってきた御家人・ 中世の郡上は、高鷲の豪族・鷲見氏と



寺(郡上市八幡町)の加 御坊」の呼び名を持つ かし、遠藤氏は、郡ト 叛旗を翻しました。 し 本峠を越えて畑佐に侵 郡上を攻略しようと坂 九)、飛騨の三木氏が に立てこもり遠藤氏に の郷士たちも、畑佐砦 に呼応して気良・畑佐 人しました。この侵攻

めました。 勢を得て、三木勢を撃 退、明宝での支配を強 浄土真宗の古刹・安養

地を没収され、加茂郡小原に左遷され ました。この時、遠藤氏に代わて郡上 に対抗する行動をとったため、郡上の領 信長の死後、遠藤氏は一時豊臣秀吉

遠藤氏などが力を持っていました。

あった遠藤氏が宗家・東氏を攻め滅ぼし

郡上一帯を支

永禄二年(一五五九)、東氏の一族で

を治めたのは、稲葉氏です

地内の郷士としては、気良佐藤氏、寒水 村の近郷を支配しました。このほか明宝 して畑佐氏を名乗り、郷士となって畑佐

ありませんでした。 藩領となり、明治維新まで変わることが となりました。 明宝の集落はすべて郡上 藩主として再び郡上一帯を治めること についた遠藤氏は、その功績により郡上 関が原の合戦(一六〇〇)で徳川家康

代でした。 代、井上氏二代、金絲氏二代、青山氏七 江戸時代の郡上の藩主は、遠藤氏五

濃斎藤氏に什

た。遠藤氏は美 下に入りまし 氏など明宝の郷 氏や寒水遠藤 配すると、畑佐

士も遠藤氏の旗

えますが、織田信長が の配下となります。 美濃を征服した後は子 長尾で銀の鉱脈が発見され、当時の郡 天正年間(一五七三~九二)、奥住の

畑佐鉱山の変遷

永禄一二年(一五六 源となっていました。 鉱山として栄え、主に民間人によって経 るまで、代々採鉱に関係した家系です。 す。原家は延宝年間から明治時代に至 佐に銅鉱が発見され、郡上藩主遠藤氏 めていたといわれ、藩にとって大切な財 営されました。元禄の頃(一六八八~) はその採掘を原庄兵衛に許可していま た。延宝七年(一六七四)には、対岸の畑 七〇三)には、毎年御用銅を千斤ずつ納 上八幡城主・稲葉氏自らが経営しまし

畑佐鉱山は、郡上における代表的な

を再開しました。 八〜五一)になって水抜きに成功、採鉱 後、再三復興に努め、寛延年間(一七四 なると坑内に地下水が湧き出し、修復 に出費がかさんだため、享保元年(一七 一六)には操業を停止しました。その しかし正徳年間(一七一一~一六)に

盛を極め、当時の藩主金森氏への上納金 宝暦八年(一七五八)、畑佐鉱山は全

畑佐鉱山跡

び地下水が

す。その後再 いわれていま は三千両と

藩主となった 山氏が郡上

ましたが、青 湧き衰微し

間(一八五四~ ました。安政年 八〇)には、これ

買い上げて経 を民営に移し 営を再開させ 直後に鉱山を

間で一万両にも達しました。

金は五年 藩主への献 は大きく その利潤 ましたが、

銅の生産を始めました。 篠田から採掘権を買った加賀の木谷孫 市)の篠田某へ三千二百両で売却され 六は、明治一四年(一八八一)から銀や 明治時代になると鉱山は芥見、岐阜

鉱し、生産力は大きく伸びました。 約二百人の鉱夫が一昼夜三交代制で採 など新しい生産方式が取り入れられ、 明治二〇年代には、鉱山に動力機械

七日に事故が発生、前月起きた濃尾 しかし明治二四年(一八九一)一一月

木が枯れるな れる煙で、山の 錬時に排出さ るにつれて、精 の生産が高ま す。また、鉱山 地震の影響だ といわれていま

下流の農 蚕農家や も発生、養

どの問

で、鉱毒事件も起きました

家との間

りの歴史に幕を降ろしました。 五年(一九一六)ついに事業は中止され ました。こうして畑佐鉱山は、二百年余 し、鉱山の経営が行き詰ったため、大正 明治末期になると銅の価格が下落

宝暦の郡上一揆

取り方を検見取りに変更しようとした ことをきっかけに起こりました。 宝暦の郡上一揆は、郡上藩が年貢の

の増収をはかるため検見取りに変更し 出費は増えるばかりです。このため年盲 や江戸屋敷が二度も火事に遭うなど たのですが、これに反対したのが農民た 当時の藩主は金森氏。二度の国替え

の代表が江戸に出て、老中酒井忠寄に 籠直訴をしました。この一揆は農民の訴 宝暦五年(一七五五)、郡上百姓一揆



えが幕府に取り上げられ、判決が出る をつくるなどして団結を図りました。 まで数年間続きました。この間、 判決では中心となった農民が死罪な 脱落者が出ないよう傘連判状

を受けたのは、江戸時代を通じてこの事 因で、藩主から幕府の役人までが処分 頼錦は領地を没収され、幕閣重臣も厳 しい処分を受けました。農民の一揆が原 どの処分を受けただけでなく、藩主全禁

ました。 平治らは過料銭三貫文ずつに処せられ 放、寒水村の治郎左衛門・西気良村の喜 ほかにも、西気良村の嘉右衛門は重追 は死罪、由蔵は郡上において獄門、その 長介です。籠直訴人の善右衛門と長介 寒水村の由蔵、東気良村の善右衛門と 明宝で一揆の中心人物となったのは、

郡上藩の山林政策

御竹薮、平山、持林の三つでした 江戸時代の郡上藩の山林は、御立山

らない。これに背く者は罰する」と書か はもちろん、雑木・下草まで取ってはな の立札には、「この立山の木を伐ること 御立山・御竹薮は藩の直轄で、御立山

年(一七九九)の郡上郡村高付覚帳によ 要のために経営されるものでしたが、郡 水源御立山を設けていました。寛政一一 上藩の場合、水源の保持・涵養のために このように御立山・御竹薮は藩の霊

> ったことがわかります。 ると、二間手・万場に、水源御立山があ

れた山を意味しています。 きる山のことで、持林は個人所有が許さ

下げています。 郡上藩は飢饉などの災害で困窮した

代金を支払わなければならなかったた (杉・桧・槙など)は一切の伐採を禁止さ たとえ平山や持林であっても、停止木 実行した村はなかったようです。これは れており、自分の普請で必要な材木も を植えるように触れましたが、その後、 年(一七九九)、郡中の村々に対し、杉苗 その一方、植林政策も実施。寛政一一

励しています。 本、くださることになった。・・・」と授 場合、平山なら六〇本、持林なら七〇 けるようにせよ。一〇〇本植え付けた 触書で、・・・平山・持林とも多く植え付 かったため、文政一〇年(一八二七)の このように植林に協力する者がいな

もなく終始していたようです。 のある山持ちの外には顧みられること ていますが、余り効果はなく、ゆとり その後も植林を奨励する触書が出され

心豊かな村づくりを目指して

が実施されると、二間手地区を役場の 明治二二(一八八九)年七月、町村制

所在地とし、名称を「二間手村外六ヶ村 まりです。その後明治三〇年(一八九 組合役場」としたのが明宝村の歩みの始

平山は一定地域の住民が共同利用で

村や住民には、御救いとして、御立山の 部を貸し出したり、平山の木を払い

で幾度もの村名変更を経てきました。

この間、産業もめまぐるしく変遷。

方村」、そして平成四年四月一日より 村」に、昭和四五年(一九七〇)には 明 七)、組合組織を廃止し村名を「奥明方

明宝村」へと一一五年という歴史の中

果をもたらしました。

観光面や安定した雇用確保に大きな効 の一環として第三セクター企業を設立。 昭和六〇年代からは、地域活性化施策 れるようになりました。

したが、昭和初期から牛の飼育も行わ また、古くから馬の産地として有名で の生産が県下一といわれるまでに成長。 って衰退しました。昭和初期には、木炭 なりましたが、生糸の価格の下落に伴 場が稼動し、養蚕及び製糸業が盛んに 明治の中頃には、三〇を数える製糸工

実施しています。 を目指して、さまざまなプロジェクトを 伝統文化と将来を見据えた地域活性化 たな一歩を踏み出しました。現在は、 との調和を保ちつつ、心豊かな村づくり 平成一六年には郡上市明宝として新

『明宝村誌』通史編 上下巻 平成五年 明宝村

『郡上市探訪』ふるさとをゆく』『角川地名大辞典』岐阜県』角川書店

『日本歴史地名体系21巻 岐阜県の地名』 平成一一年 郡上郡教育振興会 平成元年 平凡社

ふるさとの街・探訪記



環境に優しい川づくり

自然豊かな吉田川

明宝の中央を流れる総延長二二㎞の清 きな支川の一つ。烏帽子岳を源流に、 吉田川は長良川上流部でもっとも大

田川を中心に発展しました。

明宝とその下流郡上市八幡町は、

吉

彩り、深い峡谷状の地形とあわせて美 ザクラ、ケヤキ、ヤナギなどが河畔を が多くなりますが、サワグルミやフサ 物が棲息しています。中流部では植林 然度の高い森が広がり、さまざまな動 しい渓流景観をみせています。 上流部にはブナやミズナラなどの自



木立、これらが絶妙に調和して、訪れ 立つ波、そして河岸を彩る四季折々の 田川を代表する風景です。淵に白く泡 緑色の淵をみせ

島谷用水を魚が泳く 川の眺望は、まさ 情を変える吉田 に絶景です。濃 場所により表

る人を魅了してやみません。 る三原付近は、吉

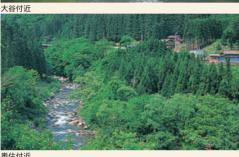
> 活を支えています。 ています。豊かな川魚は、 カ、アカザなど多くの魚たちが棲息し イワナやアユ、アジメドジョウやカジ 吉田川はまた、サツキマスをはじめ 川漁師の生

ど、さまざまな活動を展開しています。

を設立し、特産物の開発や販売拠点の整備な からの脱却を目指し、五つの第三セクター会社 まちづくりを昭和六〇年代からスタート。過疎 が進められています。また、明宝では住民参加の を設置。魚たちの遡上を可能にする環境へ整備 この清流を守るために、既設の砂防堰堤に魚道 吉田川は多くの魚たちが生息する自然の宝庫

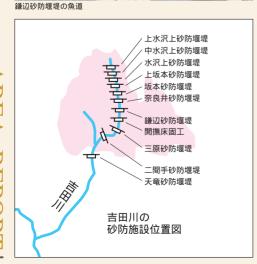
が清涼であることを示しています。 マゴやニジマスなども泳いでおり、 ら引き込んだ水路です。ここには、ア 自然豊かな吉田川も、ひとたび大雨 八幡町を潤す島谷用水は、吉田川か











AREA REPORT

ック式スパイ

が降るとその姿を一変させます。下流 吉田川には多くの砂防施設が設置され への土砂流出を防ぐため、明宝地内の

魚にも優しい渓流づくり

る堰や堰堤等の横断施設について、魚 です。そんな中、魚類の移動を阻害す め、魚類の移動経路を分断していたの を守るために設置されてきましたが、 これまでは緊急性を重視してきたた 砂防施設は土砂災害から人々の財産

> デル事業」が計画され、長良川もモデル る。魚がのぼりやすい川づくり推進モ 類がさかのぼれるように環境を改善す 河川として指定されました。

川では、河口から源流まで魚類がのぼ 淡水魚の王国づくりを掲げ、長良川本 策定した「長良川ビジョン」のなかで、 れることを目標として取り組むことに 岐阜県では、流域の基本方針として

類の生息状況や良好な河川環境を考 このため、吉田川についても豊富な魚

> が進められています。 などして、魚にもやさしい渓流づくり え、既設の砂防施設に魚道を設置する

魚たちが観察できる明宝の魚道

道には魚の遡上を観察できるよう見学 砂防施設が七ヵ所あります。このうち 用の通路が設けられています。 中でも

構造です。

いう珍しい ラル魚道」と

やすく、環境にも配慮した「二連トラ 上坂本砂防堰堤の魚道は、魚が遡上し 一間手砂防堰堤、上坂本砂防堰堤の魚 明宝地区内には、魚道が設置された

> 状の構造と うならせん クを回るよ 動場のトラッ 魚たちが運

ら見ることができます。 なっており、魚道内の魚は

観察窓」か

です。民間 う高原開発 れた。めいほ いで設立さ ったのは、つ の中心とな ます。 在になってい 観光開発

号(平成四年に国道昇格)沿いに「道の 業として進め、平成元年に国道四七二 の従業員数は季節雇用も合わせて約百 では三〇万人を超えています。ここで スキー 客は、飛躍的に増え続け、現在 年に「めいほうスキー場」をオープン。 案内所、特産物の販売所、休憩施設等 五〇名。雇用の拡大に貢献しています。 企業と近隣町村の協力を得て、平成元 を兼ね備えた、「道の駅」建設を村の事 また、観光産業の拠点としての総合

> 駅・明宝」(磨墨の里公園)を開設しま います。 て地域の若者が主体となって運営して ズ」は、「道の駅」の経営を主な業務とし した。 平成二年設立の「明宝マスター

そして最後

が、平成四年 に誕生したの

新産業おこしは第三セクターで

どによる地域活性化施策をスタートさ の実現に向け、観光開発や産業振興な

は、開発による交流人口の増加と特産 活性化の基本としての新産業おこし

> らの原動力となったのは、五つの第三セ クターです。 のテーマのもと、実施されました。これ 品の開発、販売拠点の整備という三つ

間売上一二億円と地域経済の中核的存 現在は社員、パートあわせて七六人、年 がその後の村おこしの原点となり、明 動により、「明宝八ム」は、トット商品に す。その後も官民一体となった販売活 ら計画を大きく上回る実績を築きま 業を展開。中部未来博、高山博といった に設立した、明宝特産物加工」でした。 大きく成長しました。「明宝八ム」の成功 イベントで販売活動を続け、初年度か 万村の改称につながることになります。 明宝八ム」を主力製品に特産物加工事 最初の第三セクターは、昭和六三年

宝村に改称)は過疎からの脱却を目指

昭和六〇年、旧明方村(平成四年明

し、通年型観光立村と若者たちの定住

和五〇年代以降、過疎化と高齢化が進

に養蚕、畜産が盛んでした。しかし昭

かつての郡上市明宝は、林業を中心

過疎からの脱却

活気あふれた明宝を目指し

加のまちづくり

み、自治体としての存続を危惧するよ

うな状況となってきました。

きる施設として広く開放してきました 成功した温泉は、当初、無料で利用で 宝温泉開発」を設立しました。掘削に て温泉開発に着手。平成二年には、「明 平成元年には、通年観光地を目指し

した。 ープンさせま として新規オ 温泉湯星館. を図り、明宝 に施設の充実 が、平成七年



ループから 生活改善グ す。ここは、 ディース」で た、明宝レ

生まれた女

さとすびりっと賞を受賞、平成一六年 す。平成九年には、中日農業賞、平成 採れるトマトの規格外品を使った「明宝 に選定されました。 には農林水産省、立ち上がる農山漁村 より、全国的な人気商品となっていま トマトケチャップ」は地道な販売活動に で、スキー場・温泉の飲食サービスと農 産物加工を主要事業として展開。 村で 一五年には第八回ちいき経済賞・ふる

「クリーン作戦」を花りっぱり運動として

継続し、四季折々の花々が、道行く

人々を楽しませています。

花・音楽・スポーツを中心に

過疎の村という づくりを第三セクターで進めながら いきました。村では観光開発、特産品 ターの経営は、村の姿を大きく変えて 順調に成長を続ける五つの第三セク

を研究し、花・ するための方法 をキーワードと 音楽・スポーツ イメージを払拭

スポーツにつ



花については花街 う高原音楽祭」、 開催する めいほ 夏の夜に盛大に 楽については、ジャ いては、スキーや ズを基調として直 スノーボード、音



めいほう高原音楽祭

道づくりとともに

と同時に、明宝の全住民が参加する 街道づくりを進めてきましたが、それ 街道」では、岐阜県と協力しながら、花 花りつぱい運動」を展開させました。 また、国道四七二号、通称、せせらぎ

小川地区のむらづくり

五年度の、豊かなむらづくり全国表彰 区は独自の村おこしを展開し、平成 事業」において、「内閣総理大臣賞」を受 こうした活動の一方、明宝の小川地

将来を見据えたむらづくり(コテージ でした。以後、「小川ふるさとづくり委 学校花壇づくりが始まったことが発端 校で子育てに父親も参加させようと、 和四七年(一九七二)、地区の小川小学 退とともに地区が元気を失っていた昭 林保護、鳥獣害対策、伝統文化の継承、 員会」を結成し、農業生産の強化、森 小川地区のむらづくりは、林業の衰

> を行ってきました。 小川きの里」)など、さまざまな活動

輝かしい栄誉を射止めたのでした。 地域の活性化を進める地道な活動が、 い新規就農者を生み出し見守るなど、 ふるさと小川を育てるとともに、若

さらなる発展を目指して

ちづくりに結実したのでしょう。 る住民総出の活動は、魅力あふれるま 第三セクターや小川地区に代表され

から平成七年には一二八名へと飛躍的 売業・小売業は、昭和四〇年の四九名 成七年には三七七人に増加。中でも卸 業総数は、昭和四〇年の二五八人が平 に増加しています。 産業別就業人口を見ると、第三次産

> ターの会社をやってみないかとい 村長の高田さんから、第三セク も楽しい活動でした。しかし、元

かってきたように見受けられます。 五八世帯となり、過疎化に歯止めがか 年の五五四世帯に比べ、四世帯多い五 も一%をきりました。世帯数も平成一 査に比べると一八人の減少で、減少率 の調査では二千百五十三人で、前回調 が二千百七十一人でしたが、平成七年 また、平成二年の国勢調査では人口

「南蛮煮」「ふきのとう」「赤かぶ

結。 現在は、「トマトケチャップ」 気・元気」をイーガンに、一致団 できるのだろうか、と悩みまし

家の主婦でしたから、ほんとうに われたときには、私は普通の農

た。でもそれからは「ヤル気・勇

った特産品を生産しています。こ

こに工場があれば、地元の女性

ら」など、地元の農産物だけを使

うです。 も高く評価され、今後もさらなる目標 受賞や栄誉に見られるように内外から 目指した明宝のまちおこしは、数々の ラの整備が進んだことが地域の活性化 に向かって、とどまることを知らないよ を促進しています。 過疎からの脱却を さらに税収が飛躍的に伸び、インフ

皆さまも応援してくださいね。

育てもできるようになりました。

これからも、がんばりますので、

の方々も、遠くに働きに行くこ

とはなくなります。安心して子

明宝レディース社長 本川栄子さん

理好きの農家 イース」は、料 まって、「農業 の主婦らが集



そもそもの始まりです。料理を 婦人グループ」を結成したのが、 したり、献立を考えたりと、とて

『第3セクター会社概要』 平成一五年『明宝村第三次総合計画』 平成八年参考文献

AREA REPORT

冬空に稜線を描く山々は、純白のベールを



日に包まれた明

自然を満喫するせせらぎ街道

せせらぎ街道に進路を向けると、純白 の雪を抱いた山々が出迎えてくれます。 チェンジで降りて、国道四七二号、通称 東海北陸自動車道を郡上八幡インタ Jのせせらぎ街道は、奥美濃の玄関□

め 約七○kmの自然豊 飛騨高山へと続く 「明宝」で一休みす 出。そんなドライブ ちらと舞う小雪 きるドライブルー 夏の緑、秋の紅葉、 るのも、旅の上手な 情緒たつぷりに演 は、冬のドライブを トです。冬空をちら じて自然を満喫で 雪国の冬、一年を诵 かな道。春の新緑 に疲れたら、道の駅

気良の里が生んだ名馬・磨墨

央には、名馬・磨墨 所です。駐車場の中 設する広大な休憩 磨墨の里公園を併 道の駅明宝」は



と公園内を見下ろしています。 に乗った武将のモコメントが威風堂々

挙げたと言われています。磨墨は、惜し ぞ」と声を掛け、景季の注意が一瞬逸れ 川を渡り、先陣を競いました。この先陣 り拝領の名馬・池月と磨墨に乗って宇治 川で対峙し、義経軍の武将・佐々木四郎 四)、源義経は兄頼朝の命を受け、木曽 戦」で名高い名馬です。寿永三年(一一八 た隙に宇治川を渡り、先陣の名乗りを は、景季に「馬の腹帯が緩んでおられる 争いで最初に、流れが急な宇治川に乗り 高綱と梶原源太景季がそれぞれ頼朝よ 義仲討伐に向かいました。両軍は宇治 入れたのは、磨墨に騎乗する梶原景季。 これに遅れた池月に騎乗の佐々木高綱 磨墨は平家物語の一節、宇治川の合

> りの「春駒」の一節にもその名が唄われ たのが、ここ明宝の気良の里。郡上おど 名を残す名馬です。その磨墨を産出し くも先陣争いには敗れましたが、後世に ているほどです。

> > 流に洗われた川

れるのですが、清 ワナを焼いてく 火で、アマゴやイ

美味しさです。 が落ちるほどの の幸は、ほっぺた 明宝へ出かけてみませんか。

く明宝は、旅の宝箱。自分流の旅を探して ゆったり、のんびり。四季折々の自然が息づ を満喫したら、満天の星降る露天風呂で ースノーのゲレンデで、ウインタースポーツ せせらぎ街道は、スキー場へと誘う。パウダ まとって凛とそびえ、ゆるやかにカーブする

ることなく受け継がれてきた「千葉家の 続けるいろり火は、約八百年の間、絶え は、イチオシのスポット。ここで年中燃え が盛りだくさんです。中でも、「磨墨庵」 などなど、名馬の産地にちなんだ施設 館」や「磨墨庵」「磨墨の里公園物産館. いろり火」から分火されたものです。 広大な磨墨の里公園には、「磨墨会

込んだこともあったと 宅の後ろの竹薮に逃げ があったときには、この れ、以来、家長が責任を持つて火種をリ 火打石で点けられたのが始まりといわ す。この火種は、承久三年(一二二一)に 火種を火鉢に移して自 1 してきました。地震 兵衛さん宅で燃え続けているいろり火で 「千葉家のいろり火」は、気良の千葉孫

> ができます。 なるとカタクリの可憐な花を見ること スポットとなっています。ここでは、春に ぎの池公園」が整備されており、憩いの りる小径があります。川沿いに せせら の横に、裏手を流れる清流吉田川に降 この、磨墨庵」

ビジネスマンたちでいつもにぎわってい チェックできるので、観光客はもちろん めば、観光情報もEメールにも自在に CかPDA(携帯情報端末)さえ持ち込 料接続サービスも実施中。モバイル型P この道の駅では、インターネットの無

小学校の木造校舎が資料館に

磨墨の里公園で美味しいものをたくさ

場郡上市八幡町から 楽しみ方です。

か。「磨墨庵」ではこの炭

旧・明・宝・村・の・歳・時・記

めいほう高原音楽祭 毎年7月最終土曜日

音楽でまちおこしをと、平成2年夏以来毎年開催されている全国規 模の野外フェスティバル。国内外より著名アーティストを招き、めい ほう高原野外音楽堂「ソノラシアター」を舞台に深夜まで一万人以 トもの執行ファンたちが直夏の夜の夢に酔いしれます。現在第14回 まで継続関併中

毎年11月3日 めいほう高原秋まつり

ならやぶなの木々が黄金色に色を変え、めいほう高原の山々が黄金 色に染まる頃、野外音楽堂「ソノラシアター」前広場において毎年開 催される秋まつり。山の幸をふんだんに使った名物"千人鍋"などの 振る舞いで秋の味覚を堪能しながら、ステージショーで大いに盛り 上がる、地域色豊かなふるさとまつり

毎年9月8日・9日

寒水地区において、毎年 9月8日・9日の両日にお いて行われる神事芸能 で、総勢130名余りの村 人たちが参加する勇壮か つ厳粛な踊りです。特に 寒水白山神社拝殿前で長 さ3.6mものシナイを背

磨墨生誕の地 寒水白山神社掛踊

千葉家のいろり火

名古屋方面からお車をご利用の方

東名・名神自動車道

(約25分)



国田家のお花畑

森本遺跡

上市明宝地区

せせらぎ街道 国道472号

(約30分)

畑佐鉱山跡

郡上市役所明宝庁舎

交通のご案[

東海北陸自動車道

(約50分)

郡上市役所 明宝地域振興事務所産業振興課 〒501-4307 岐阜県郡上市明宝二間手606 - 1

TEL0575-87-2211 http://www.gujomeiho.jp/

負い、太鼓や鉦を胸に付けた四人の若者が力強く舞い踊る場面は、 この掛踊りの最大の見せ場でもあります。昭和37年「岐阜県重要無 形文化財」昭和47年 国の選択民俗芸能」に指定を受けています。



満開の桜の下で遊ぶ子どもた が始まり、村中がアウトドアの れると、高原の牧草地では放牧 れる。そして、緑豊かな夏が訪 では太公望たちが釣り糸を垂 うです。桜が山々を彩り、清流 ちの笑い声が聞こえてくるよ

> 教えてくれるのでしょう。 それぞれの自然の豊かさや楽しみ方を ステージになります。移ろいゆく季節は

求めて、集まってきているようです。 イ ボーダーたちが、純白のゲレンデを そして今は冬、多くのスキーヤーやス



民からの無償提供されたもので、当時の 生活様式が窺える貴重な資料に触れる

そいます。展示品の九割以上が地元住

万七千点という膨大な民俗資料を展示

な資料館で、縄文時代から現代まで、四 に小学校の木造校舎を利用した┪ Tク ん食べたら、「明宝歴史民俗資料館」

ここは三〇年ほど前まで使われてい

明宝の北部、高山市との市境にほど

も体感できる資料館です

ことができ、同時に懐かしさと珍しさを

近い場所にあるのが、めいほうスキー場」

IJ

雪に包まれた資料館の前にたたずめば

の桜の名所としても人気です。純白の

明宝歴史民俗資料館」は、気良地区



ルプスや御岳を望む景色は、息を呑む は、三六〇度の大パノラマ!雄大な北ア らエキスパートまで存分に楽しめます。 日本最大級のビッグエリア。ビギナーか ような美しさです。 もちろん、標高一千六百mの頂上から これも明宝ならではの、楽しみ方で 四つのゲレンデと一二のコースは、西 冬場の今は、スキーシーズン真う盛

温泉でのんびり、ゆったり

宝へ飛び出してみ です。さあ、冬の明 ぶのかは自分自身 す。どんな旅を選 まさに旅の宝箱で



もりっこはうす

牧場」、自然体験セン ター「もりっこはうす 楽の森」や「めいほう から秋にかけて、「 ました。ほかにも春

テージが、たくさん用意されています。 たり、親子で木工クラフトを楽しめるス など、自然を満喫し 喫することができます 鮮な山の恵みや川の幸を、思う存分満 りには、手作りの味処「ゆうゆう」で、 星空を楽しむことができます。お風呂上 です。中央の吹き抜けから星影が差す 風呂やうたせ湯、ジャトバスを備えた 自然の恵み。広々とした建物には、露天 からこんこんと湧き出る温泉は、 を流したら、明宝温泉「湯星館」へ。大地 大浴場などがあり、まさに温泉づくし 星映の井戸」は、館内にいながら満点の

しさをぎっしり詰 グルメに温泉、そしてスキーなど、

楽

田宝温泉·湯星館

ませんか め込んだ明宝は、

スキーやスノーボードで思いっきり汗

気ままにJOURNEY | 8



その変質の過程を木曽三川における御手 伝普請を通して見ていきます。 上納する「お金御手伝」が成立しました。 変質していき最終的には単に工事費用を っていた御手伝普請ですが、時代とともに 幕藩体制下、軍役として重要な意味をも

御手伝普請の変質

手伝することです。制度化された御手 事について工事費用などを負担して御 として幕末まで続いています。 などによる利根川・荒川の普請を最初 伝普請は宝永元年(一七〇四)の高知藩 を受けた大名が本来幕府が行う治水下 江戸時代の御手伝普請は、幕府の命

用のみを負担する方法。藩士の派遣 ど多くの方法がとられています。 はなく工事費用のみを負担する方法な 士を現地に派遣して、施工に携わる方 しかし、普請御手伝の方法は、 藩士を現地に派遣するが工事費

幕府の権威の強弱が大きく影響してい 組織体制や財政事情などを背景とした これら御手伝普請の変質は、幕府の

初期の御手伝普請と

御手伝普請の初期にあたる宝永・正

督にあたるとともに、工事費用を支払 者の選定は幕府勘定所が行い、御手伝 いました。 藩は、藩士を現地に派遣して工事の監 態は、町人請負が主流でした。 請負業 徳期(一七〇四~一七一六)の普請の形

よる不良工事や工事に伴う不正を防ぐ します。これは現地に精通しない者に 三)に町人や村役人による請負を禁止 しかし、幕府は、正徳三年(一七一

う方法に変化しました。 伝藩が人足を直接雇用して工事を行な 従って、以後の普請の形態は、御手

川における薩摩藩による宝暦治水がこ の形態で行なわれました。 より大きなものとなりました。 木曽三 遣する必要があり、御手伝藩の負担は この方法では多数の藩士を現地に派

工事費用のみの負担への変質

最終的には幕府勘定所が工事を実施 やがて御手伝普請は徐々に変質し、

> の影響を与えたとも考えられます。 されていませんが、薩摩藩による宝暦治 る形態となります。変化の原因は特定 し、竣工後その費用を諸大名に賦課す 水の実態が、幕府の治水対策に何らか

回も行なわれています。以下、その普 請形態の変質を見ていきます。 六一)までの一一四年間にわたって一六 享四年(一七四七)から文久元年(一八 木曽三川における御手伝普請は、延

御手伝藩による施工

明和三年の御手伝普請までは、御手伝 享四年の御手伝普請に始まりますが、 潘が直接工事に携わっています。 木曽三川における御手伝普請は、延

しました。この時には既に幕府によっ 遣し、延享五年一月二二日工事に着手 は、すべての工事が請負業者による「町 本松藩は、七百名余の藩士を現地に派 方請負」で進められました。 延享四年 | | 月 | 三日御手伝の幕命を受けた| 延享四年(一七四七)の御手伝普請

> 月の短さでした。 います。この間、工事期間は僅か二ヶ 配置され、同年三月二〇日に竣工して て二〇工事ヶ所に四四人の請負業者が

し、五月二日に一期工事を終え、九月 るよう指定されたことによっています。 民を雇用して施工する「村方請負」とす われています。これは、工事を地元農 名、現地雇用を含めると二千人とも云 は、家老の平田靭負をはじめ九四七 命令を受けて、現地に派遣された藩士 宝暦三年一二月二七日に御手伝普請の は、薩摩藩によって行なわれました。 |四日には||期工事に着手し、宝暦五 工事は、宝暦四年二月二七日に着手 宝暦三年(一七五三)の御手伝普請



「町人請負」とするように幕府に請願し で、多くが「村方請負」で施工されまし ましたが、数箇所が認められただけ 及びました。薩摩藩では難工事箇所を の多くが「村方請負」とされ、しかも だけでした。 長期にわたった普請は、この宝暦治水 た。木曽三川の御手伝普請の中で工事

の六月三日には竣工しています。 総勢千二百人の藩士を現地に派遣し、 が混在しました。 明和三年二月七日 なわれましたが、「 町方請負」「 村方請 は、萩藩・岩国藩・若狭藩の三藩で行 負」そして「お金御手伝」の三つの形態 に御手伝普請の命令を受けて、三藩で 二月二八日に工事に着手し、二ヶ月後 明和三年(一七六六)の御手伝普請

当の部分が「町方請負」や幕府で施工し が、総費用が二六万両とされているこ とと二ヶ月の工事期間を勘案すると相 た部分の、お金御手伝」であることが想 工事の全容は明らかでありません

お金御手伝普請への転換期

御入用普請として工事を開始したもの は、お金御手伝」に変わっていきます。こ 明和三年の御手伝普請が最後で、以後 を御手伝普請に変更したものでした。 の転換期での御手伝普請は、いずれも 御手伝藩が直接施工に携わったのは、

明和五年(一七六八)の御手伝普請 徳島藩など五藩が御手伝を命じら

的に普請場所を引渡し、藩において施 ら、少数の藩士を現地に派遣し、形式 毎に普請場所が定められていることか 御手伝の具体的内容は不明ですが、藩 て、御手伝命令は五月四日でした。 されたのが明和五年一月、これに対し れていますが、幕府によって工事が開始 工したという形式を執ったようです。

赴くように」と指示されています。 ばないから、少人数が速やかに現地に るので、大勢の役人を派遣するには及 令を受けたのは安永八年一月二九日で て着手されていて、鳥取藩が御手伝命 した。その際「工事は大半ができてい 工事自体は一二月に幕府勘定所により は、鳥取藩によって行なわれました。 安永八年(一七七九)の御手伝普請

二月二八日に竣工し、引き渡しを終え けて一応の施工体制を整えましたが、 受け二月二三日に工事用の元小屋を受 現地では、目論見書や図面の交付を

に分けて江戸の金蔵に納入しています。 御手伝金は、現地での納入の他、二回 天明三年(一七八三)の御手伝普請

するようにとの指示を受けています。 の藩主の指図を待っていては手遅れと 日でした。命令に際して「御普請之儀 けたのは、竣工を目前にした七月一 なるから、江戸在勤の者を現地に派遣 最早出来之事ニ候間・・」として、国表 て、小倉藩など五藩が御手伝命令を受 工事は天明三年五月に着手されてい

> は明らかです。 ら、藩士の派遣が単に形式であること 工事は、八月二日に竣工していますか

渡しを受ける形を踏襲していました。 は、形式的にしろ現地で普請場所の引 しかし、この段階までの御手伝普請

お金御手伝制の成立

大きく変質して行きます。 請から実質は幕府費用の肩代わりへと れることが通例となるなど、御手伝普 令も工事の竣工から数ヶ月後に行なわ 所の特定がされなくなり、御手伝の命 の形骸化がさらに進行して、御手伝場 寛政期以降の御手伝普請は、御手伝

るお金御手伝への進行が見られます。 っていました。竣工後に御手伝を命じ ることから、この時には普請は殆ど終わ の目付が四月八日に江戸を出立してい 月に既に始まっていて、竣工検分のため が御手伝を命じられました。工事は一 では、三月二八日に二本松藩など六藩 寛政元年(一七八九)の御手伝普請

寛政八年(一七九六)の御手伝普請

て褒賞を賜っています。明石藩など三藩 が、八月一八日には関係者が江戸におい 工されています。竣工の月日は不明です 十二ヶ村にわたり三つの工区に分けて施 勘定組頭坂野喜六郎らに見分を命じた 惨事となったため、寛政八年一月二〇日 工事を開始しています。その範囲は百八 幕府は、勘定奉行以下に普請役を命じ、 前年の水害では大垣城まで浸水する

> す。これは関係者への褒賞の時期などか ら工事竣工後であったと思われます。 にたいする御手伝命令は六月一九日で

寛政一一年(一七九九)の御手伝普請

発生し、低地は一面泥海と化したと伝 寛政一〇年四月八日未曾有の洪水が

生行	بخد	-	-	-	_	1 8 4 4 4		天保		8	333	文正	Ţ.		1 8 1 8		文化	1804	享和	1 8 0 1	i	寛政	1 7 8 9			天明		1 7 8 1	安永	1 7 7 2		明和		1754 宝暦	8	4	1741 寛保	3 6	享保	1 7 1 6	正徳	1 7 1 1	宝永		1 7 0 4	元禄
7)名令の言章に フロミノじタの役号・行者言	る等り己成ま			開国・尊王壌夷運動	上		天	9 甲斐	7 天保七年の御手伝普請	諸藩の藩政改革	12 関東·甲斐	6 関東	4 関東·東海	3 文政三年の御手伝普請	関東・	13 文化 三年の御手伝普請(含東海道)	10 関東	2 文化二年の御手伝普請(含束海道・甲斐)	享和二年の	享和元年	寛	寛政八年の		東海道	寛政の改革			関東・	<u>- </u>		5 月印丘手の卸手云等青2		田沼時代	3 宝暦三年の御手伝普請				-	5 国役等請の制度	4 利根川・荒川	町	6 駿河·相摸	相摸	正徳の治	利根川·荒川	1

戸を発ち工事に着手。翌年春には竣工 役が普請の命を受け、九月一五日に汀 えられています。八月三一日、勘定吟味 して三月一五日に江戸に帰り将軍に拝

明和三年の御手伝普請に次ぐ大きなT られました。その費用は二〇万両余と なり四月二七日に津藩など九藩が命じ この普請も御手伝普請とすることに

金の負担のみを指示され三回に分納し が、この御手伝普請においては、単にお 普請の担当区域が示されていました また、従来はお金御手伝であっても

中旬の三回に分納するとしています。 るようにお金手伝が定着してきました が工事に着手、翌享和元年五月一五日 は、寛政 | 二年 | 二月 | 三日に勘定所 しています。この普請も竣工後の六月二 に係役人一同は江戸にあって将軍に拝謁 上納金は八月下旬・一○月下旬・一二月 日に広島藩が御手伝を命じられてい 享和元年(一八〇一)の御手伝普請

他河川と一括した御手伝普請

られているように

大災害でした。

含めて御手伝とされている点で、従来 川単独ではなく、関東や甲州の普請を 文政・天保の御手伝普請を除き木曽三 とは性格を大きく異にしています。 次の享和二年の御手伝普請以降は

は享和二年八月二八日に御手伝を命じ 享和二年(一八〇二)の御手伝普請

> 金は不明です め、これらをまとめて御手伝普請とし、 終えて将軍に拝謁しています。この年に 請を命じられ、四月一五日には工事を 事は、享和元年一二月に勘定奉行が普 られていますが、木曽三川におけるT ました。従って、木曽三川に限った御手伝 は、関東や甲州でも普請が行なわれたた 大聖寺藩など六藩に御手伝が命じられ

文化二年(一八〇五)の御手伝普請

が定着しています。この傾向は幕末まで 回に分納しているように上納金の分納 手伝普請の命令は、二ヶ月後の六月二 やして四月には江戸に帰っています。御 請を命じました。工事は三ヶ月余を費 続いています。 た。川越藩では、八月・九月・一一月の三 日に至り川越藩など八藩に下されまし 人に、東海道、甲州・濃州・勢州川々御普 幕府は、一二月六日勘定組頭ら一六

高須領地五百七八十人溺死・」と伝え 害に対する普請でした。被害の状況は 請は、文化一二年六月に発生した大水 高須城並びに近辺の水深一丈七八尺、 文化一三年(一八一六)の御手伝普

三月一五日に江 事を行ない、翌年 が江戸を発し、一 は御勘定組頭ら 三工区に分けて丁 一 一 月九日に

> 戸に帰り将軍に拝謁しています。 四月二九日に至って御手伝普請とする

請を命じました。御手伝には、木曽三川 の他、東海道筋の普請が含まれています。 こととして、薩摩藩など七藩に御手伝普

震災復旧の御手伝普請

旬の三回に分けて上納しています。 では九月中旬・一一月中旬・一二月中 て木曽三川に関わる費用でした。萩藩 ど三藩に御手伝を命じています。御手 の修復で、勘定吟味役が、一二月一五日 は、文政二年六月に発生した地震被害 伝金は五万七千両余で、これらは、すべ も御手伝普請とすることになり萩藩な 八日には江戸に帰っています。この普請 に江戸を発ち工事に着手して、四月一 文政三年(一八二〇)の御手伝普請

「油島締切」最後の御手伝普請

天保七年(一八三六)の御手伝普請

工事を進めまし 仰せつけられ、ハ は、御普請御用を 九日に勘定奉行 天保六年一〇月 つの工区に分けて

た。延享四年の御



切」についても、洗堰修復として普請の対 手伝普請以来続けられていた「油島締 象とされていました。後の御手伝普請で に対する最後の御手伝普請でした。 は対象とされていませんから、油島締切

> 月に分納されています。 のと見られ、上納金は、六月・八月・一〇 は木曽三川の普請のみを対象としたも 御手伝を命じられています。この御手伝 七年二月二四日に、小倉藩など五藩が 工事の竣工月日は不明ですが、天保

御手伝金の三年分納

して命じました。 さらに八月六日富山藩ら二藩にも追加 石藩など五藩に対して御手伝を命じ、 ます。その三ヶ月後の七月二二日に明 日には、江戸に帰り将軍に拝謁してい 事は五工区に分けて施工し、四月一五 五日に勘定吟味役が現地へ出発し、工 (一八六一)の御手伝普請は、一月 最後の御手伝普請となった文久元年

半高当酉年相納 残り半高は来戌年 るようにと指示していることです。 付・・」とし、上納金は三ヶ年に分納す 来々亥年二ヶ年二割合上納之積一 ことは、幕府の口達において、金高之内 を含む御手伝普請でした。特筆すべき この普請も木曽三川のほか東海道筋

『岐阜県治水史』上巻 木曽三川明和治水の概要』 丸山幸太郎昭和五六年(岐阜県 参考文献

普請費用(万両) (両)、備前小倉 前号の歴史ドキュメント(11頁 詫びします。 藩 豊前の誤りでした。訂正してお 普請毎の御手伝普請金比較図」中、 訂正とお詫び



岐阜女子大学地域文化研究所長

丸山 幸太郎

御手伝普請が始まったわけ

川において実施した。 治水工事を御普請と呼び、その普請地 請を「御普請御手伝」と呼んで、宝永 元年 (一七〇四) に初めて利根川・荒 と関係のない大名に御手伝をさせる普 幕府は、公儀費用をもって実施する

戸時代にはあったが、幕府が実施する 行うべき普請を大名に肩代わりさせる 施する御普請としながら、その負担の 始まったのである。名目は、幕府が実 河川工事で、普請地と関係のない大名 城番をさせるとかの軍役的負担は、 につながるものであった。 るものであった。言わば、 遣させ、大坂城改修工事や改易大名の に手伝をさせる形態は、このときから 八割かそれ以上を御手伝大名に負わせ 大名の所領高に応じて藩士たちを派 長く続ければ幕府の権威失墜 幕府自体が . 江

の御普請御手伝が始まったかについて どうして、 宝永元年という時期にそ

次の二点が背景にあると考えら

1幕府財政の窮迫から諸大名に負担 2河川流域で新田開発が進展し流水 幕府では対応しきれなくなる 域を狭めて水害が頻発するように なり、その流域の小領主や村々と を代替させざるを得なくなる

を支出、 震・津波と、大火・水害・震災・津波 四年東海道から四国・中国に及ぶ大地 張の光友に合わせて二四万両貸与、 政逼迫の甲府の綱豊・館林の綱吉・尾 再建をはじめ復興処理に二〇〇万両余 明暦三年 (一六五七) 江戸大火で本丸 などの災害が続き、それらの対応に幕 文九年江戸大火、元禄二二十二三年全 府財政支出は増え逼迫していた。 1の幕府財政の窮迫事情については 同一六年関東大地震災害、 寛文五~八年将軍家親族で財 同一五~一六年全国各河川大 宝永

任した綱吉が、相次いで寺社造営をし それに加えて、延宝八年に将軍に就

なっていた。 たり、寛文に創設された幕府関係者の つかせ、財政破錠状況を呈するように を展開して、家康時代の蓄財をも底を 役料を本高に加算するなど放漫な財政

ば、次のような状況であった。 2としては、木曽三川の場合で見れ

川水系の美濃や淀川水系の摂津で実施

請とは、江戸初期の寛永期から、木曽

定地区とされたところである。

国役普

幕府によって、享保五年に国役普請指

これらは、全国屈指の水害多発で、

ていたものである。それを、幕府が全

けとめる相互扶助のしくみで実施され 地方の治水をそれぞれの国内全体で受 されていた治水普請形態で、水害多発

国の幕府領の集中する地域の河川の治

期の慶長~正保期に、多芸・石津・海 れ苦しんでいた。 る公儀普請や国役普請を受けながら、 流域の小領主や村民は、幕府が実施す めとする新田開発で堤内に囲いこまれ 池が本阿弥新田 (二〇〇町歩) をはじ 地であった高須輪中の南の遊水草地や 新田が開発された。それ以後、 西・安八の四郡だけでも二万石に及ぶ 水害復旧や川除 (護岸) の工事に追わ を頻発させるようになった。 そのため 出水時の滞水場がなくなり、 木曽三川下流域では、江戸時代初 未開発

の武士と百姓・町人を動員し、費用負

水に及ぼそうとしたもので、

大名以下

〇ページ最下段の「主な御手伝普請 暦治水以前に実施されたのは、 木曽三川最大の御手伝普請である宝 本誌

氏 表に見られるようであった。

丸山 幸太郎氏

昭和12年8月岐阜県恵那市に生まれる。岐阜大 学史学科卒、県歴史資料館長、岐阜市明徳小学 校長を経て退職。現在岐阜女子大学文学部客員 教授、同大地域文化研究所長、池田町在住。 主な蓄書・「幕藩制解体過程の農村、「古田織 部、「日本農書全集第一期、)巻、近び「同二期/、 巻」、岐阜県史」、「岐阜市史」、「担要い「自要」、「池

田町史」「南濃町史」「平田町史」「輪之内町史」「恵那市史」「宮村史」「神岡町史」「上矢作町

史」等他、多数。 平成14年には「ぎふ観光と食文化(岐阜県先 人顕彰研究会)を発行して注目を集める。

両程度までのものであった。国役普請 工事などがあったが、それは、幕府が た元禄期まではその程度で良かった。 精々普請費が二〇〇〇両から五五〇〇 のは隣接国まで掛ける、という形態で る国内が主体で多額の費用の掛かるも 担を強制して実施するものであった。 しかし、その負担範囲は普請地があ 幕府主導の治水の主軸をなしてい それより規模の大きい水害復旧

MLK&TALK 12

対応が幕府財政の窮迫でできなくなっ 規模な河川工事実施を実現する御手伝 て、諸大名に負担を肩代わりさせて大 御救普請等で対応していた。 そうした 普請が治水の主役になったのである。

木曽三川では延享四年から

国法とは、御普請がある村は水下役と 称された治水体制の一環であり、 た。勿論、その方式は「治水四法」と 扶助の治水共済制度の性格を持ってい それは、美濃独特の国役普請で、相互 復旧や護岸工事などに当たってきた。 すという治水共済制度を布して、水害 して高百石に二五人(銀二五匁)を出 制の基礎を築いたのである。その濃州 五八~一六三一) とその息子で跡を継 は、大久保長安のあと、美濃国幕府首 体制を布いていたからであろう。 それ の延享四年に始められたのはなぜか。 始まったのに、木曽三川では四三年後 御手伝普請が、利根川では宝永元年に て普請有無にかかわらず遠所役銀を出 上藩・苗木藩などの領村は定遠所とし し、木曽三川下流域でない岩村藩・郡 して高百石に百人まで一人五合扶持で たる中で濃州国法という独特の治水体 行となって木曽川水系の河川工事に当 いだ善政 (一六〇五~七八) が治水奉 轄領の代官頭となった岡田善同 (一五 人足を出し、 そうでない村は遠所役と それは、木曽三川では、独特の治水 規模の大きな治水普請を可能にする

自普請などと関連で見なけらばならな

次のように明示された。 請之事」がそれである。 その第一項に た。「元禄八年八月、美濃国堤川除普 幕府勘定所の定書によって成文化され 元禄八年 (一六九五)、濃州国法は、 木曽三川の治水問題が高まってきた

は三〇人程出され候由の事 所方の分は、或いは二五人、或い 石に付人足百人、水下の外又は遠 は申すに及ばず、水下の分は高百 仰せ付けられ来たり候、其の領分 き所は、公儀へ願い、国役御普請 川除破損の時、手前普請に叶い難 一、濃州壱万石以下私領方堤

良高木三家 (美濃衆)が任命された。

るようになった。 互扶助的国役普請や公儀普請を実施す 府直轄領美濃代官 (郡代)主導で、相 としては、幕臣の財政維持のため、 旗本の数が特に多い国であった。 幕府 る旗本は七○家に及び、一国単位では 領をさすのであり、美濃で所領を有す 一万石以下の私領というのは、旗本

門守参が、治水事業に積極的で、元禄 たので、大きく整備された。 とともに、普請費負担形態を明確化し 取払う「宝永の大取払い」を実施する と宝永元年川々の水行を妨げる諸物を 役から美濃郡代に着任した辻六郎左衛 年 (一六九九)幕府勘定所の勘定吟味 六年・同一七年の大規模な国役普請 木曽三川流域治水体制は、元禄一

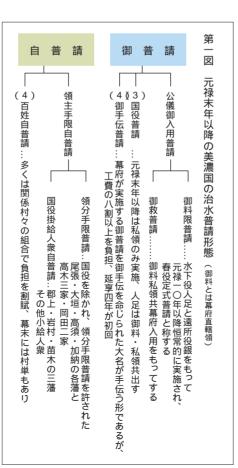
> わたって除去せしめた、抜本的なもの 行の障害害物を木曽二川及び諸支流に る川通の葭草・樹木・竹藪・家など水 毛が皆無となったことへの対処であり の流出が多く三万余石の村々の田畑作 大取払いは、水害頻発の重大原因であ 高須・本阿弥・福東三輪中などの人家 元禄一五・一六年と相次いだ大水害で この元禄末年の大規模国役普請は、

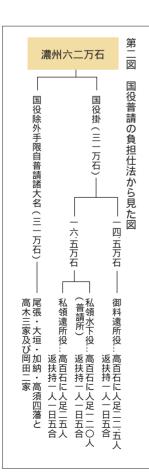
であった。以後の川通の巡視には、美 行や水論調停などを勤めてきた旗本名 濃に在住して美濃郡代とともに治水奉 図にしめされた体制で展開された。 このような治水体制が整備されて対 これ以降の治水は、第一図及び第一

施されるようになった。 題をはらんでいた木曽川水系ではあっ となり、以後、次々と御手伝普請が実 年の二本松藩による御手伝普請が初回 たが、始まってから四三年後、延享四 応していたことで、 水害が多く治水問

延享四年御手伝普請の目的

は 幕府の勘定吟味役井沢弥惣兵衛為永 享保二〇年勘定吟味役兼任で美濃





TALK & TALK

現は、滝川代官の後、延享三年に赴任 郡代に任命された。当時八二歳であっ てからであった。 及び関係河川を綿密に巡視して三川分 濃に滞在したのは五か月であった。そ た。在任期間は二年余であったが、美 けられたが、実現に至らなかった。実 向けて幕府当局へ請願が出され働きか 土木の巧者であった井沢は、木曽三川 言した。彼の三川分流計画は、次の美 流治水工事計画を立て、幕府当局に建 んな短期間であったが、紀州流の治水 した青木次郎九郎安清郡代時代になっ **ሎ代官滝川小右衛門貞寧時代に実現に**

がうと、次のようであった。 が少なかった、とよく書かれる。しか た。この御手伝は規模が小さくて効果 州二本松藩丹羽若狭守高庸に命じられ 普請の目的を「御普請仕様帳」でうか し。それは妥当な評価ではない。その **濃勢州川々の水行御普請の御手伝が**風 先ず、延享四年 (一七四七) 一一月

2 木曽川の水を刎出し揖斐川の流れ め、油島新田及び松ノ木村に杭出 を圧することを緩和する そのた |木曽川の水を出水・常水共佐屋川 に延長二百間の杭出を設置 へ落とし、木曽川の水位を下げる そのために中島郡石田・十町野

3揖斐川の水を疎通させる そのた め、香取川通の付洲を堀割り、且 つ桑名川の洲浚えをする

> 帳の三六の普請箇所について実施して 普請である。 等を浚渫する水行普請につながる先行 が強化される。3は、四の手の桑名川 築造となり木曽川の揖斐川圧迫の減少 ○間猿尾出しとして強化される。2) の水の佐屋川落としのため石田村二五 場と比べると、1は、一の手の木曽川 うべきものである。 宝暦御手伝の普請 おり、その内容は、井沢郡代の三川分 は、四の手の油島と松の木間の喰違堰 流工事計画の一部を実行に移したと言 二本松藩の御手伝は、ほぼこの仕様

士も民も長く苦しんだ。 年貢収取が原因で、二年後の寛延二年 であった。そのためもあって、過重な 総支出の三〇パーセントを越えるもの と見られる。それに対し、二万両は 要したと見られる。二本松藩は所領高 その工事規模から二万両以上の支出を 達をはじめ、工事の進捗に当たった。 かで、遠い木曽川下流の地へ藩士ら七 などの負担で藩財政は疲弊していたな 入・支出の規模は、 およそ六万両程度 万石は間違い) であり、年間の財政収 ○○人を派遣して普請材料や人足の調 一〇万石 (『岐阜県治水史』記載の六 一七四九)一揆が発生しており、藩 二本松藩は、享保以降度重なる国役

ど施設の改善改修が相次いで営まれた 以後、油島の喰違堰や大榑川の洗堰な 藩の宝暦御手伝も言外ではない。 治水の効果が少ないというが、

> ばならない普請であった。 無かった、と特に言うのは適切ではな の常習地帯から脱出できなかった。そ が、抜本的な治水にはほど遠く、 て、木曽三川治水史に位置づけなけれ い。 むしろ宝暦治水の先行的普請とし れ故に、延享四年御手伝は治水効果は

明和三年御手伝の特色

延享四



宝暦四、 一七六六 津氏御手 御手伝、 長州萩藩 明和三 伝のあと 五年の島 年丹羽氏

がうかがい知れよう。 析すれば、お金御手伝に転換する要因 換の契機になった明和三年御手伝を分 御手伝大名の所領高に沿い割賦するお の推捗を図るものとしては最後のもの れた河川工事場へ藩士を派遣して工事 の明和三年御手伝は、自領から遠く離 の三氏による御手伝が実施された。こ 利氏・岩国藩吉川氏・越前小浜藩酒井 金御手伝に転換するのである。 その転 府が先に工事を実施して、その工費を となった。その後の御手伝普請は、幕

御手伝への転換の要因は、島津氏の宝 実は、藩士現地派遣御手伝からお金

> それと比較しつつ、明和三年御手伝の 特色を列記しよう。 暦御手伝にあるように思われるので、

- が出たという記録はない。 死者が出たが、明和三年では死者 宝暦治水では八九人の自殺など
- けられた。 で、能率の悪い村方請負を押し付 た。宝暦治水では、百姓救済目的 が同行し迅速に丈夫に工事を進め 水理土工に慣れた町人請負業者
- る」ことが協調された。 は省略して「普請を立派に仕上げ 幕府方への挨拶など儀礼的なこと 普請心得の申渡しでは、 江戸の
- 金御手伝が一部あった。 仕越普請 (幕府が既に実施) のお 牛牧の逆水留閘門など難工事の
- 追加普請が少なかった。
- 月前後で帰国できた。 藩士派遣滞在期間が短く、二か

良いという趨勢となっていった。 となり、お金御手伝制に転換した方が て、明和三年御手伝の犠牲者記録無し ある。即ち、宝暦治水への反省があっ た事態にならないように配慮したので あった。 幕府側も御手伝方も、そうし 生し責任を負って自殺者が出る状況に 普請の推捗に当たるなど、諸問題が発 摩藩士が、全体の半数に及ぶ村方請負 宝暦治水は、水理土工に慣れない薩



小川 の大滝の主 郡上市明宝

弓掛川は、アマゴやイワナが泳ぐ美しい清流です。

滝壺の底に住む主に引きずられるかのように 川流しの材木が滝壺まで流れて来ると 流れ落ちる滝になっています。 小川の大滝と呼ばれたこの滝の滝壺はかつてはとても深 の川は小川集落の下流で白い飛沫をあげて

深く沈んでしまい 水の上に跳ねあがったそうです しばらくたってからパシーという大きな水音を立てて

踏みこたえようとしましたが、 驚いた翁は岩角で両足をふんばって 急にその網が滝壺に向かって動き出してしまいました。

村の翁が滝の尻で投網をしたところ

江戸時代末期のことです。

網を持つ手首がちぎれるほど

あまりの強い力に、翁は生きた心地がしなかったとか。 網はぐいぐいと引っ張られる有様

どうもこうもならんときにはお念仏を唱えるんやな」 寝ても起きても、阿弥陀さまと二人連れやで。

すると、どうでしょう。 このとき、とっさに翁は、お寺のお坊さまの言葉を思り出し なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」とお念仏を唱えました。

網が水からずるずると抜け

放してしまったのでしょう。 滝壺に引きずりこもうとしていた網を 力あまって岩の上にひっくり返ってしまい 満身で綱を引っ張っていた翁は きっと、滝壺の底に住む主がお念仏におじけづき しばらく息が止まって動けませんでした。

恐ろしい目にあった翁は

お神酒を差し上げないと、滝壺は荒れ、 それから、材木を流す川の衆は 入滝に差し掛かると、お神酒をさしあげるようになりました*。* といつも言うようになりました 大滝にだけは行くでないぞよ。あすこには主がおるでなり 人切な材木は、呑みこまれてしまうからです

木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分~午後4時30分 《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始 《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分 名神羽島I.Cから車で約30分 東名阪長島I.Cから車で約10分

お問い合わせ》 船頭平閘門管理所

木曽川文庫 〒496-0947 愛知県 愛西市立田町福原 TEL(0567)24-6233



上: 磨墨の里公園にある磨墨と武将の銅像

後

を企画しています。身近でおこった出 地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、岐阜県郡上市明宝の 皆様及び、丸山幸太郎氏にご協力いただきあり がとうございました。お礼申し上げます。

次回は、岐阜県可児市を特集します。ご期待 ください。

「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曽川文庫ホームページ www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp

下:吉田川 (磨墨の里公園裏)

『KISSO』Vol.57

SSO』Vol.57 平成18年1月発行 :国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市 木曽川下流河川事務所ホームページ URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu TEL(0594)24-5715 〒511-0002三重県桑名市大字福島465

制作: 財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976